

(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 登録実用新案公報 (U)

(11) 実用新案登録番号

実用新案登録第3183716号
(U3183716)

(45) 発行日 平成25年5月30日 (2013.5.30)

(24) 登録日 平成25年5月8日 (2013.5.8)

(51) Int.Cl.

F 1

B 6 5 D 23/00 (2006.01)

B 6 5 D 23/00

B

B 6 5 D 81/32 (2006.01)

B 6 5 D 81/32

V

評価書の請求 未請求 請求項の数 3 O L (全 6 頁)

(21) 出願番号 実願2013-1364 (U2013-1364)

(22) 出願日 平成25年3月13日 (2013.3.13)

実用新案法第11条において準用する特許法第30条第2項適用申請有り 展示会出展 展示会名：FOODE X JAPAN 2013 開催日：平成25年3月5日

(73) 実用新案権者 396023373

株式会社ハンダ

埼玉県入間市黒須2丁目4-25

(74) 代理人 100083183

弁理士 西 良久

(72) 考案者 繁田 昌利

埼玉県入間市黒須2丁目4番25号 株式会社ハンダ内

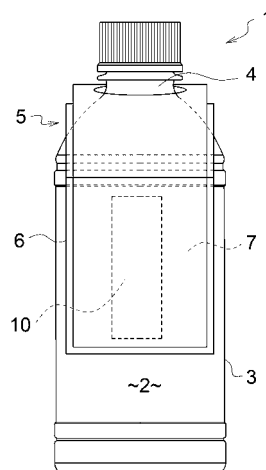
(54) 【考案の名称】 飲物セット構造

(57) 【要約】 (修正有)

【課題】スティック包装された粉末緑茶などの粉末体と、該粉末体を溶かして飲用にする水などの液体とをセットにした飲物セット構造を提供する。

【解決手段】水等の液体が充填されたボトル3と、該ボトル3の注口側の頸部4に掛止める孔を有し、該孔を介してボトル3に吊り下げられる短冊状の吊下体5と、該吊下体5に形成された収納部に収納されたスティック状の包装体10と、該スティック状の包装体10に収納されて、前記ボトルの液体全部と混ぜ合わせて飲物とするに適した量に設定された粉末緑茶等の粉末体とからなることを特徴とする。

【選択図】 図1



【実用新案登録請求の範囲】**【請求項 1】**

水等の液体が充填されたボトルと、
該ボトルの注口側に掛止める孔を有し、該孔を介してボトルに吊り下げられる吊下体と、
該吊下体に形成された収納部に保持された個別包装の包装体と、
該包装体に保持されて、前記ボトルの液体と混ぜ合わせて飲物とするに適した量に設定された粉末緑茶等の粉末体とからなることを特徴とする飲物セット構造。

【請求項 2】

ボトルが水を充填したペットボトルからなっており、
粉末体が、茶葉を微粉末とした粉末緑茶からなることを特徴とする請求項 1 に記載の飲物セット構造。

10

【請求項 3】

ボトルが水を充填したペットボトルからなっており、
粉末体が、緑茶をフリーズドライまたはスプレードライした粉末緑茶からなることを特徴とする請求項 1 に記載の飲物セット構造。

【考案の詳細な説明】**【技術分野】****【0001】**

本考案は個別包装された粉末緑茶などの粉末体と、該粉末体を溶かして飲用にするための水とをセットにした飲物セット構造に関するものである。

20

【背景技術】**【0002】**

従来、例えば特開 2008 - 245982 号の医薬品と水とのセット包装体では、1 ~ 3 回服用する量の医薬品を収納した医薬品包装体と、前記医薬品を服用するに足る量の水を収納した容器とからなり、販売時点において、前記医薬品包装体と前記容器を一体としたことを特徴とする医薬品と水とのセット包装体が知られている。

しかしながら、上記構成では、液体容器に収納される水の量が、医薬品を服用するために必要な量に定められており、任意の量の水が収納された液体容器を用いることができない。

30

これは、医薬品を服用することを目的とするためであり、水を飲用することは副次的な問題と考えているためであり、粉末緑茶などの粉末体を水に溶いて飲料として用いる場合には適さない。

【先行技術文献】**【特許文献】****【0003】**

【特許文献 1】特開 2008 - 245982 号公報

【考案の概要】**【考案が解決しようとする課題】****【0004】**

この考案は、上記事情に鑑みて創案されたものであって、ボトル内の液体の量に合わせて、該液体と混合して飲物とするのに適した量の粉末緑茶などの粉末体を個別包装して、販売時に、ボトルとセットにした飲物セット構造を提供することを目的とする。

40

【課題を解決するための手段】**【0005】**

上記課題を解決するために、請求項 1 記の考案では、
水等の液体が充填されたボトルと、
該ボトルの注口側の頸部に掛止める孔を有し、該孔を介してボトルに吊り下げられる吊下体と、
該吊下体に形成された収納部に保持された個別包装の包装体と、

50

該包装体に保持されて、前記ボトルの液体と混ぜ合わせて飲物とするに適した量に設定された粉末緑茶等の粉末体とからなることを特徴とする。

【 0 0 0 6 】

前記ボトルが水を充填したペットボトルからなり、

前記粉末体が、茶葉を微粉末とした粉末緑茶からなるものでもよい。

前記粉末体は、緑茶をフリーズドライまたはスプレードライした粉末緑茶からなるものでもよく、製法は問わない。

【 考 案 の 効 果 】

【 0 0 0 7 】

本考案は、ボトル内の液体の量に合わせた粉末体をボトルに掛け止めてセットで販売し、飲用時に粉末体を液体に溶かして飲物とし飲用に供することができるので、香りに優れ、品質の劣化を抑えることができる。

【 図 面 の 簡 単 な 説 明 】

【 0 0 0 8 】

【 図 1 】 本考案による飲物セット構造を示す正面図である。

【 図 2 】 吊下体に粉末緑茶を収納する状態を示す分解斜視図である。

【 図 3 】 (a) は粉末緑茶を収納した吊下体の側面から見た断面図、(b) は背面図である。

【 考 案 を 実 施 す る た め の 形 態 】

【 0 0 0 9 】

以下に、本考案の飲物セット構造の粉末体を緑茶粉末に適用した好適実施形態について図面を参照して説明する。

【 実 施 例 1 】

【 0 0 1 0 】

本考案の飲物セット構造 1 は、水 2 が充填されたペットボトル 3 と、該ペットボトル 3 の注口側の頸部 4 に吊り下げられる短冊状の吊下体 5 と、該吊下体 5 に保持された粉末緑茶 1 1 入りの 1 つの個別包装の包装体 1 0 とからなっている。

【 0 0 1 1 】

[ペットボトル]

ペットボトル 3 は、ボトル本体の上部に、上端に注口を有する小径の頸部 4 を有し、キャップで密封された公知形状からなり、280ml、350ml、500ml、900ml、1.5L、1.8L、2L等のほか、任意の容量を収納しうようになっている。

この考案では、ペットボトルに限らず、吊下体 5 を掛止め可能な水筒状やポット状、酒瓶状その他の任意形状の容器もボトルの範囲に含まれる。

【 0 0 1 2 】

[吊下体]

吊下体 5 は、本実施例の場合、短冊状のシート 5 A と、該シート 5 A に貼り付けられるプラスチックフィルムからなる袋 6 と、前記シート 5 A と袋 6 とで形成された収納部 7 とからなっている。

吊下体 5 は、少なくとも包装体を保持しうる大きさ、形状であれば、短冊状に限定されず、任意の形状とすることができる。

【 0 0 1 3 】

前記シート 5 A は、紙からなり上部に孔 5 B を穿設しており、該孔 5 B は前記ペットボトル 3 の頸部 4 に着脱可能に嵌め込むことができる径に設定されている。

前記孔 5 B は、無端の任意形状の孔に限らず、孔からシート 5 A の縁部まで続く切離線を有する構造であってもよい。

シート 5 A の素材は特に紙に限定されず、プラスチック、布、木、金属など任意の素材を用いることができる。

【 0 0 1 4 】

10

20

30

40

50

このシート 5 A の表面及び又は裏面に表示部を設けることができ、例えば、一面に商品名称や標章などを表示する表示部 8 A を設け、他面に収納する商品表示や使用法、飲み方などの説明文などの任意の事項を表示する表示部 8 B を設けることができる。

【 0 0 1 5 】

袋 6 は、本実施例では透明なプラスチックフィルムからなっており、上部が開口して前記シート 5 A の全部又は一部を挿入することができる。

また、上記袋 6 の一方の面の上部は嵌合したシート 5 A にシール S されており、シート 5 A との間に密閉された空間を形成しており、該空間を収納部 7 として使用することができる。

【 0 0 1 6 】

10

上記収納部 7 には、スティック包装された 1 つの包装体 1 0 が収納される。

即ち、本実施例では、前記袋 6 は、表裏一方の面が他方より長く延出しており、上部開口からシート 5 A を挿入し、次いで、挿入されたシート 5 A と前記袋 6 の上端が長く設定された面との間に後述の包装体 1 0 を収納し、収納してから、上端が長く延出した部分をシート 5 A に貼り付けることで、包装体 1 0 を収納部 7 に密閉することができる。

【 0 0 1 7 】

この考案では、吊下体 5 の構造は前記実施例に限定されるものではなく、シート 5 A と袋 6 とを別体にせず、一体とするものでもよい。

即ち、シートに一体に袋を形成し、該袋に包装体 1 0 を収納した後に袋の上部を封止して包装体 1 0 を密閉するものなど、要するに、ペットボトル 3 の頸部 4 に掛止めることができると共に、包装体 1 0 を収納しうるものであればよく、その構造は実施例に限定されない。

20

【 0 0 1 8 】

本実施例では、収納部 7 は、袋状となって包装体 1 0 をそっくり包み込むようになっていいるが、この考案では、例えば、吊下体 5 に直接、または吊下体 5 に連結したシートに包装体 1 0 を掛止める切欠を設け、包装体 1 0 を吊下体 5 に着脱可能に保持して収納する構成であってもよい。

【 0 0 1 9 】

[包装体]

包装体 1 0 は、緑茶粉末 1 1 を個別包装の一例として示すスティック包装した構成からなっている。

30

スティック状とすることで、ペットボトル 3 への緑茶粉末 1 1 の投入を容易にしている。

【 0 0 2 0 】

[緑茶粉末]

緑茶粉末 1 1 は、緑茶葉をそのまま微粉末としたものを用いたが、緑茶をフリーズドライやスプレードライした粉末であってもよく、水に混合して飲用に供しうる粉末であればよい。

この緑茶粉末 1 1 は、ペットボトル 3 に収納された水の量に対応して、最適の量が決められる。

40

例えば、500 ml の水のペットボトルに対して 0.5 g から 1 g の緑茶粉末を用いる。

【 0 0 2 1 】

[使用法]

吊下体 5 の袋 6 のシール S 部分を剥がして収納部 7 を開口し、中からスティック状の包装体 1 0 を取り出す。

ここで、吊下体 5 はペットボトル 3 から取り外しても、そのまま掛け止めたままでもよい。

【 0 0 2 2 】

次いで、包装体 1 0 のスティックを開封し、蓋を開いたペットボトル 3 の注口からステ

50

ック内の緑茶粉末 1 1 を全部入れ、蓋を閉じるなどしてペットボトル 3 をよく振って、水と緑茶粉末とを混合することで、飲用に供することができる。

ここで、ペットボトル 3 内の水は、満杯よりも少し減らしておく方が混合しやすく好ましい。

【 0 0 2 3 】

このように、ペットボトル 3 の容量に合わせて、吊下体 5 に収納する粉末緑茶 1 1 を最適の量のもものと組み合わせることで、ペットボトル 3 の水を、飲用時に適切な濃度の緑茶飲料に変化させることができ、香り豊かで酸化のない緑茶を飲むことができる。

【産業上の利用可能性】

【 0 0 2 4 】

上記実施例では、ボトルとしてペットボトルを例示したが、瓶やポットなどのボトルであってもよい。

また、ボトルには水以外の液体が収納されているものでもよい。

更に、包装体として粉末緑茶を用いたが、その他の粉末で前記液体と混合して別の飲物となるものであれば、適宜な組み合わせで適用することができる。

その他、要するにこの考案の要旨を変更しない範囲で種々設計変更しうることも勿論である。

【符号の説明】

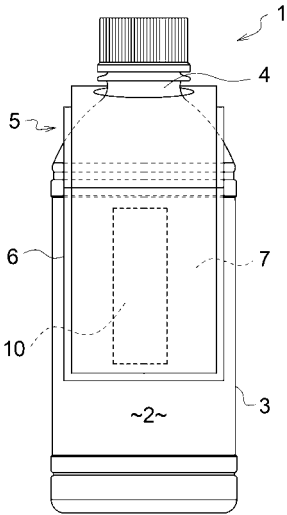
【 0 0 2 5 】

- 1 飲物セット構造
- 2 水
- 3 ペットボトル
- 4 頸部
- 5 吊下体
- 6 袋
- 7 収納部
- 1 0 包装体
- 1 1 粉末緑茶

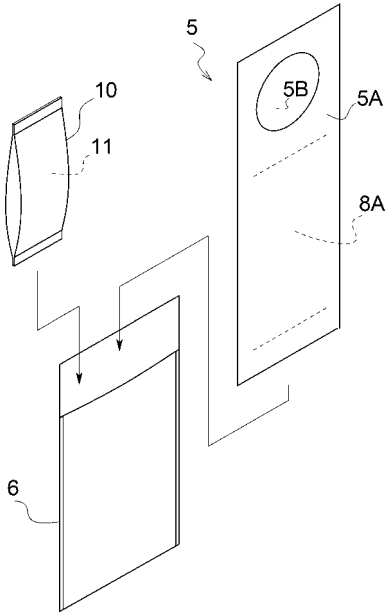
10

20

【 図 1 】



【 図 2 】



【 図 3 】

(a) (b)

